

農村振興局長賞

針江区（滋賀県高島市）

我が町の誇り、「生水（湧き水）」と「川端」のある生活

高島市新旭町の針江区は、比良山系に源を發する安曇川の伏流水が流れています。この地下水脈に配管を打ち込むと清浄な水が自噴するので、各家ではこの湧水を利用して「川端（かばた）」と呼ぶ仕組みを作り、飲用等の生活用水として利用してきました。

川端からでた大量の湧水は、町中を流れる川に入り、最終的には琵琶湖に注ぎます（1日の湧水量はタンクローリー約250台分に相当）。この大量の湧水のおかげで、川の水が清浄かつ低温に保たれており、各種の藻や魚が生息することで針江の景観や環境



が形成されています。

「川端」は水が湧き出るところである「元池(元池の水は飲用に利用)」、元池から溢れた水を溜め野菜や果物を洗ったり冷やしたりする「つぼ池」、つぼ池より出た水を溜め鯉などの魚類を放流している「鯉池」から成ります。鯉池では野菜や食器類を洗うが、食器類についた残飯などは鯉の餌になるので川端から出て行く水は浄化されます。このような構成・機能を持つ川端は、鯉を飼育するという過程を経て針江独特の水文化をもたらしました。

湧水と外から引き込んだ水は、混合されて再度外の水路に出ていきます。このため、上流で汚れた水を排出すると下流の川端に飼われている鯉に影響を与えるので、「川端に利用される水路の水や川端から出る水は汚さない」という暗黙のルールが成立したのです。また、餌を与えて飼育するうちに鯉に情が移り、家族の一員として愛されるようになりました。

昔は生活必需品であった川端も、水道の敷設や家の建替えにより減少しています。しかし、湧き水や鯉と接することのできる憩いの場として現在も約100軒以上の家で利用されており、針江地区の伝統的な景観を形成しているのです。

2004年1月及び4月にNHKテレビで、四季折々に姿を変化させる針江地区の風景や川端を用いた

生活の風情が「里山 命巡る水辺」として紹介されたことで、全国から沢山の人が訪れるようになりました。

しかし、映像の場所はほとんど個人の宅地内であり、訪れた人は現地を見ることできない、なかには家の中を覗き込む、場合によっては強引に家の中に入る人が出てきて、住民の生活が乱されるようになる、という問題が生じました。

そこで、針江区が先頭にたって有志を募り、2004年5月にボランティア団体「針江生水の郷委員会」を立ち上げ、新旭町観光協会を窓口として委員会メンバーが交代で案内や接待を行うようにしました。来訪者は徐々に増加して、年間1000人を超えるようになってきています。

■講評

天然の恵みである「川端」を、水道が整備された現在でも利用することで、地域内の「水」を介したコミュニティが形成されています。「上流で水を汚すと下流の家が困る」という意識がきれいな水を守り、地域の景観を美しく保っています。このように水を通じたコミュニティの繋がりが地域の誇りを醸成しており、水を守る活動を柱とした環境保全の観点から高く評価されました。

